HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	18-20世紀初頭の中央アジア＝ロシア間の隊商交易
Author(s)	塩谷, 哲史
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 60-61
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.60
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88311
Type	journal article
File Information	JB013_012shioya.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

18–20世紀初頭の中央アジア＝ロシア間の隊商交易

塩谷　哲史

本報告は、18–20世紀初頭の中央アジアとロシアを結んだ隊商交易について、オレンブルグを考察の対象に据えながら概観する。16世紀中葉のロシアのヴォルガ流域への進出以降、中央アジア南部諸都市とロシアを結ぶ交易はアストラハン、マンギシュラク半島、ヒヴァ、ブハラを結ぶルートを中心に発展した。18世紀前半には、北方ではジューンガルの拡大、南方ではナーディル・シャーの征服活動の影響を受け、中央アジア南部諸都市の社会・経済は混乱状態に陥った。しかし18世紀後半になると、1730年代から新たに構築されたオレンブルグ＝シベリア要塞線に沿った諸都市から、カザフ草原を経由し、中央アジア南部の諸都市を結ぶ隊商を担い手とした交易が拡大した。こうした交易は、定住政権の成立を後押しするとともに、その形態はロシアの軍事征服を経て1906年タシュケント＝オレンブルグ鉄道の建設に至るまで維持されていたと考えられる。

すでにロシアの東方貿易には多くの研究蓄積があり、近年はタタール商人の活動やオレンブルグの地方史に関する研究が盛んに行われている（濱本真実 2006「タタール商人の町カルガルの成立――18世紀前半ロシアの宗教政策と東方進出――」、Denisov, D. N. 2014. *Ocherki po istorii musul'manskikh obshchin Orenburgskogo kraia*. など）。一方、ロシアと中央アジア南部の諸政権、いわゆるウズベク三ハン国との関係史（最近では Niiazmatov, M. 2010. *Poisk konsensusa: Rossiisko-khivinskie geopoliticheskie otnosheniia v XVI-nachale XX v*. など）、および1860年代後半に本格化するロシア軍の中央アジア南部の軍事征服史（Morrison, A. 2014. "Killing the Cotton Canard and Getting Rid of the Great Game: Rewriting the Russian Conquest of Central Asia, 1814-1895."）が注目されているが、カザフ草原を越えて中央アジア南部の諸都市との間で行われた隊商交易についてはロシュコワ（Rozhkova, M. K. 1963. *Ekonomicheskie sviazi Rossii so Srednei Aziei: 40-60-e gody XIX veka*. など）とそれにもとづく諸研究、およびミーハレワ（Mikhaleva, G. A. 1982. *Torgovye i posol'skie sviazi Rossii so Sredneaziatskimi khanstvami cherez Orenburg: vtoraia polovina XVIII-pervaia polovina XIX v.*）を除くと十分に行われておらず、その実態はほとんど分かっていない。

本報告では、19世紀中葉に書かれたニェボリスンの通商概説（Nebol’sin, P. P. 1855. “Ocherki torgovli Rossii s Srednei Azii.”）をもとに、隊商の構成と交易の担い手、交易方法、取引品目・金額、ロシア帝国政府の通商政策などの諸問題を考察し、こうした交易の具体的な様相の一端を明らかにした。1730年代からのオレンブルグ要塞線の建設にともない、従来アストラハンを経由していたロシアと中央アジア南部との交易ルートが東漸し、19世紀中葉には同要塞線上のオレンブルグ、ペトロパヴロフスク、トロイツクが隊商の主要な発着点となっていた。ロシア帝国政府は、当初富裕な商人（第一ギルド商人）にこの交易を独占させようとしたが、19世紀半ばに至るまでは政府が特権を与えて誘致したタタール商人および彼らと結びついた中央アジア出身のいわゆる「アジア商人」がその交易を担っていた。1840年代からロシア政府はこの交易をより広い社会階層に広める政策へ、それと同時にアジア商人に特権を与えて誘致する政策から、規制を強める政策へと転換していった。こうした規制はロシアのカザフ草原への軍事的な進出と一体化して進んでいったと考えられるが、その相互の関係の解明は今後の課題である。

（筑波大学人文社会系）